

ぶらりわが街宮沢界限

(23) 新田開発 — II — 武蔵野台地開発と村落の様相

「古新田」・「新田」 — (「北多摩郡誌」大正元年発行)江戸時代の新田開発は、一般的には明暦年間(1655年頃)から享保年間(1720年頃)までに開墾されたのを「古新田」、それ以後の元文年間(1740年頃)までの開墾は単に「新田」とされている。市域もこの時期、南端の低湿地一段丘面—武蔵野台地へと時代を追って開発を進めていった。

○ 変わった名前のバス停—モリタウン北側の通りに「古新田」、諏訪松中通りの「南享保」のバス停は、かつての大神村の字名で、盛んに行われた「新田開発」を物語っています。

近世市域九ヵ村の村高の変化をみると、正保・元禄・天保の三時期における石高(こくだか)を比較すると右表のようになる。正保から天保に至る間の増石は1310石3斗5升4合で、約1.74倍の増加である。そのうち、938石6斗1升3合が元禄期までの増加であり、増石分の71.6%を占めている。それに対し、元禄以降の増加は比率にして278.4%にすぎない。また、村別の石高の変化をみると、増加の著(いちじる)しいのは、市域の西部の拝島・田中・大神・上川原四ヵ村と中神村で、それ以外の、東にある宮沢・築地・福島・郷地の村ではほとんど微増に過ぎず、正保期以前に開発が完了していたと思われる。

| 時期 参考資料 | 正保 (1644~48年) 武蔵田園簿 | 元禄 (1688~1704年) 元禄郷帳 | 天保 (1830~44年) 天保郷帳 |
|------------|---------------------------|----------------------------|--------------------------|
| 村名 | | | |
| 拝島 | 220.98 ^㉔ | 772.55 ^㉕ | 821.273 ^㉖ |
| 田中 | 30.215 | 117.538 | 117.538 |
| 大神 | 63.805 | 212.939 | 274.161 |
| 上川原 | 9.695 | 43.151 | 88.362 |
| 宮沢 | 424.9 | 419.971 | 471.69 |
| 中神 | 329.535 | 424.371 | 475.57 |
| 築地 | 99.6 | 103.536 | 115.6 |
| 福島 | 378.4 | 396.844 | 442.7 |
| 郷地 | 208. | 212.842 | 268.59 |
| 合計 | 1,765.13 | 2,703.743 | 3,075.484 |

農業にとって耕作地と同様に欠かすことができないものが「山」(雑木等の自然林)と「水」(農業用水等)です。市域の北部には承応2年(1653)通水(*「上水記」による)の「玉川上水」が江戸の飲料水を確保するために開削(かいさく)されたものですが、その分水により、砂川村分水(明暦5年(1657)開削)や柴崎村分水(宝暦9年(1737)開削)等、多摩の各地が潤(うるお)いました。しかし、市域に分水が開削されたのは、完成より80年ほど後の元文5年(1740)「拝島村分水」が開削。拝島村の飲料水として、村の北より引き入れ宿場の中を東に流れ、田中村で九ヵ村用水と合流しています。分水と井戸掘りの技術向上などにより、享保期(1720年頃)に入ってから武蔵野台地も徐々に耕地化されていきましたが、しかし、玉川上水が利用できず、水利に恵まれない武蔵野台地上の軽い野土(のつち)を中心とした耕地には、粟(あわ)、稗(ひえ)、大小麦、陸稻(りくとう)、蕎麦(そば)、芋、菜、荏(え)、大根などが主要作物でこれらのうち、大麦、粟は主に農民の食料にあてられ、他は自家消費分を除いて八王子に売られた。

また多摩川沿いも、水田と畑については、「新編武蔵風土記稿」(*①「宮沢の地名由来」)に記載文政5年(1822)の記録では、水田多く陸田少ないのは宮沢村だけで、上川原村は水田なし。また水田、陸田相半ばし、拝島村・築地村。水田少なく陸田多し、田中・大神・中神・福島・郷地の5村です。村落の様相は、畑作農家であったのです。

記 防犯宮沢支部会計 西山 禎一

